

どなすところなくとん走。同十五分ごろ多治見市を攻撃。省線駅(国鉄電車のこと)はじめ付近の農村、農家に対し初の機銃掃射を行い、進行中の旅客列車をねらったが被害は僅少(わずか、すこ)であった。」
何人も人が血を流し殺されているのに、新聞では、それがあたり前のように、しかも「僅少」と書かれている。

人を殺して手がらにするなど、ふつうではできないことが、戦争になるとあたり前のことになり、新聞もあたり前のように書き、人々は、戦争へばかりたてられていく。

私のこの文章を読んできた人が、一人でも戦争の恐ろしさ、悲しさがわかってくれれば、私はたいへんうれしい。人間の心をくるわし、人々を地獄の底につき落とすような戦争は、二度とくり返してはならない。平和は、人間の永遠の願いである。みんなの力で戦争のない世の中を実現させようではないか。
(知立市昭和町在住)

初めて名古屋に空襲があった日

辻村秀夫

一九四四年(昭和十九年)十二月、名古屋が初めて爆撃された。

一九四三年（昭和十八年）にもなると、国民の全てが戦争にかり出された。名古屋でも機械化国防協会が作られ、大学や高等専門学校の学生を対象に機甲訓練（戦車や装甲車）が開始された。初めは短期間だったが、トラックの運転を中心に、機械のことや法規のことを教わった。場所は守山の小幡グラウンド。きびしい基礎訓練をみっちり受け、半年くらいで運転免許がもらえた。

当時、校庭にはいつもトラックが七、八台置いてあった。軍からの命令があると、いつでもすぐに工場から工場への物資の輸送の仕事をした。

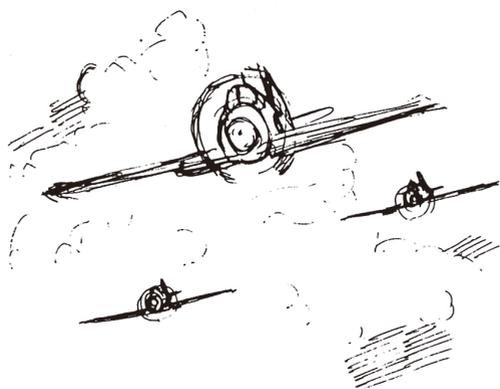
その日は、港区から航空用燃料のドラム缶かん十数本を積み、北区大曾根の近くにあった三菱発動機工場（当時、飛行機のエンジンを作っていた）に来ていた。工場の食堂で昼食を食べ終えたころだ。空襲の恐れがあることを知らせる警戒警報はもう出されていたが「また聞き慣れた警報か」くらいで、だれも気にとめていなかった。工場はいつものように動いており、発動機の試運転が行われていた。広場には数百本のドラム缶がつまれたままになっていた。

突然、空襲警報が鳴りひびいた。サイレンの音にちよつと緊張はしたものの、いつものことで、名古屋には来ないだろうとたかをくくっていた。それから数分たった。

「見えるぞ！」だれかが叫んだ。東の方の空に黒い点が見える。それは、すぐに米粒つぶくらいになり、大豆くらいの大きさになった。名古屋を目ざしての爆撃であることは確かだ。

空は快晴だ。飛行機は、七、八機ずつ編隊へんたいを組んで、きれいな飛行機雲を引きながらこっちに近づいている。高度は八千から一万メートルくらいだろう。

この時ですら、次にどんな事態が起こるか予想もしないで、じっと飛行機を見ていた。むしろ B 29 (爆撃機の名前) がどんな攻撃をするのか関心をもって見ていたのだ。あんな高い所から爆撃をして、ここに命中するはずはないと思っていた。



飛行機がななめ上に来た時、ゴーツと無気味な重い音が襲いかかって来た。今思い出しても恐怖で身振りする音だ。たくさんの爆弾が同時に落下する時、空気を押しつぶすような無気味な音がするのだそうだ。

爆弾のさく裂音が耳をつんざく。はっと我に返る。四、五百メートル先の三菱電気あたりか。

土煙といっしょに工場の柱らしいものが数十本空中にはね飛ばされている。近い。度肝を抜かれ、その威力に打ちのめされる。一刻も早くこの場から逃れなくては……。

足は自然と工場を離れて矢田川の方に向かう。そのころには、もう第二波の飛行機が、東の空に姿を現している。当時、陸上部にはいつていて走ることには自信があったはずだが、どうしたことか気ばかり焦って思うように足が動かない。ガタガタ震えて、前のめりに倒れそう。走りながら、何度も空を見上げる。百メートルほど走って、飛行機の進む方向から少しは離れただろうと見上げるのだが、何度見上げても飛行機が自分の真上を

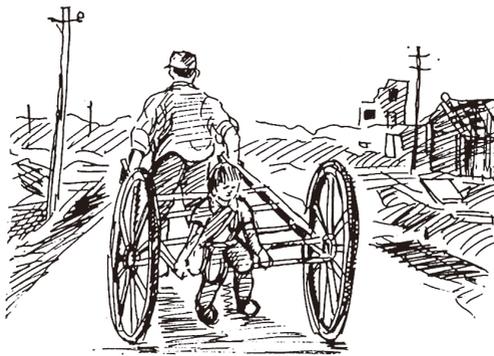
通りそうであつたらぬ。

四、五百メートルは走つたらう。無我夢中むがぢちゆうで矢田川を渡つた。冬の川は水かさは少なく二十センチくらいセンチの深さだつた。冷たさや寒さを感じている暇ひまはなかつた。爆死（爆発や爆けき）から逃げるための必死の行動だつた。

二度めの落下音が聞こえた。軍事教練で学んだように、目と耳を指で押え低地に身をふせる。と同時に近くでさく裂音れつがした。ふせた体が少し浮き上がった。助かつた。目を開けると爆発で吹き上げられた土や小石が雨のように降ってくる。見ると二十メートルほど先に直径十メートル、深さ四メートルくらいの穴がぽっかり口をあけていた。

ここも危い。さらに北へ北へ走り続ける。四キロメートル近く走つた。途中、道路上で若い女子工員さんが貧血を起こしてうづくまつている。それを同僚どうりやうの男の人が励ましている。ここにどどまることは死ぬことになる。

第三、四波の爆撃も幸運にもかかわすことができた。第五波からはもう安全な所まで逃げることでできた。遠くから、今までの工場の方をながめる余裕がでてきた。もくもくと黒い煙が続き、爆発音が聞こえる。ここまで来て、やっと落ち着きを取りもどした。工場に残して来たト



トラックのことや、学徒動員で三菱発動機に行っている同僚のことなどが気になりだした。あの時、近くにあった防空壕に避難した人達はどうしただろう。心配でたまらない。

爆撃が終わると、今逃げて来た道を恐る恐る工場をめざして帰る。工場地帯は全滅したとか、死者もかなりでたようすだなどのうわさが飛び交い、不安は一層大きくなる。

やっこの思いで川の堤防までもどった。長い時間かかったような気がする。数百メートル先から、トラックが見えた時は、ほんとうにうれしかった。つまれたままになっていたドラム缶も爆発していなかった。奇跡的なことだ。

その喜びもつかの間、工場内にはいると爆撃の恐ろしさに身のすくむ思いがした。あちこちに爆風で吹き飛ばされたらしい遺体が横たわっている。外傷もなく、生きていた当時のままの姿である。側溝の中には、手も足も首もなく、内臓と衣服が血まみれで、男の人なのか女の人なのかも全くわからない無残な遺体も目に入る。余りにも痛々しい姿だ。

すでに夕暮れが迫り、遺体の収容作業が始まりかけていた。なんとも言えない重苦しい気持ちでトラックに乗り学校に帰り着いた。

(豊川市三谷原町在住)